



Kobe Shoin Women's University Repository

KARASHI-DANE

## 芥川龍之介氏に贈ってごらんなさい：神戸松蔭女子学院大学蔵『南枝の花』スクラップブック

著者	青木 稔弥
著者別名	AOKI Toshihiro
雑誌名	文林
巻	44
ページ	51-74
発行年	2010-03-10
URL	<a href="http://doi.org/10.14946/00001587">http://doi.org/10.14946/00001587</a>



芥川龍之介氏に贈ってごらんなさい

## 芥川龍之介氏に贈ってごらんなさい

—— 神戸松蔭女子学院大学蔵『南枝の花』スクラップブック ——

青 木 稔 弥

神戸松蔭女子学院大学に南江二郎著『詩文集 南枝の花』に関するスクラップブックがある。著者自身によるものである。紹介することにした。

表紙に「文人」「戯花」「琴棋」「書画」「りうせい絵」、裏表紙に「昭和二年春」「新潮社版」「ししう なんしのはな」、背に「詩文集」「南枝の花」「南江二郎著」の文字と梅の絵がある。この表紙と背は実際に発行された『詩文集 南枝の花』のそれと全く同一。束見本 (dummy book) として作成されたものを流用しているのであろう。

まず、『詩文集 南枝の花』そのものを紹介しておこう。



縦が19センチ5ミリしかない菊判変型。新潮社刊。奥付に「著作者 南江治郎」<sup>①</sup>とあり、昭和二年五月十五日印刷、二十日発行。「定価壹円」である。

表紙と背は前述した通りだが、南江二郎による自跋「南枝の花に添へて」末尾に

末筆ながら、装幀をしてくださった岸田劉生氏の御厚情を  
深謝する。この本の表装は昨年一月から五月まで発行し  
た私の個人雑誌「文人」を永久に記念する為に、同氏の装  
幀になる「文人」の表紙を生かして、加筆揮毫を乞ふたも  
のである。

西曆千九百二十七年四月三日

とあり、もともとは南江二郎の個人雑誌「文人」に岸田劉生が与えたものの再利用であった。「文人」の創刊号は大正十五年一月一日刊、第五号は同年五月一日刊で、発行所の新詩潮社の住所「東京市外上落合五六八番地」<sup>②</sup>は編輯発行者の南江二郎のそれと同一である。「文人」創刊号の目次を参考までに示しておく。



目録 南江二郎著作

無名詩人の幻想(戯曲・二幕)……………三頁

続 近代舞踊詩劇観(評論)……………四八頁

……………

挿画(女歌舞伎楽屏風の図)……………岸田劉生蔵

装幀……………岸田劉生画

であり、岸田劉生の多大な協力により雑誌「文人」は成立している。新詩潮社から大正十五年に発行された「文人」の表紙に「昭和二年春」「新潮社版」「ししう なんしの はな」の文字があるはずはない。『詩文集 南枝の花』出版の際に「加筆揮毫」したということである。

『詩文集 南枝の花』には函がある。筆者の閲見した『詩文集 南枝の花』は京都府立図書館所蔵と日本近代文学館所蔵の二本で、後者については著者寄贈本であることは注目に値する面はあるものの、両者とも函欠。ただ、東珠樹編著『岸田劉生装幀画集』(東出版 昭50・8・10)に表紙と扉のカラー図版、函のモノクロ図版があるので、その意匠は確認できる。平の部分に「詩文集」「南江二郎著」「新潮社版」「南枝の花」の文字と梅の絵、背は、本冊と意匠は違うが、「詩文集」「南枝の花」「南江二郎著」の文字と梅の絵がある。筆跡から見て岸田劉生による「揮毫」であることに間違いはない。岸田劉生が新たに函と背を装幀し、表紙を補訂しているのである。

『詩文集 南枝の花』の最初の頁は「この詩文集を有島生馬氏に献ず」との献辞で、次頁は裏白。その次は「南枝之花」「丁卯春」「劉生写」と記された扉で、梅の枝の絵と「劉生」の朱印がある。次頁は裏白。目次に先立って「昭和二年三月末日」付の「ヨネ・野口」の三頁に渡る「序」がある。ただし、ノンブルは付されていない。四頁めは裏白。

次に「南枝の花・目録」と記された扉があり、ここで初めてノンブルが表示される。ノンブル1。ノンブル2〜5は目次。以下の通り。

序文（野口米次郎）

詩文六篇

魔鏡堂の喇嘛	……………	一頁
樂死	……………	七頁
能面師・清阿弥	……………	一三頁
Le Débris D'un Poète	……………	二二頁
白魚の料理番	……………	二七頁（*以上、ノンブル2）
愛経・外篇	……………	三三頁
姥母		

姥	五〇頁
母	五二頁
青象	
青象	五四頁（*以上、ノンブル3）
雪解	
雪解	六二頁
古式五月人形	六六頁
ひとり	
賦・その一	七四頁
賦・その二	七六頁（*以上、ノンブル4）
春信幻想詩篇	
水ぐるま	八〇頁
たはれめ	八三頁
招牌絵	八六頁
絵草紙屋の娘	九〇頁
跋・散文詩の研究（外山卯三郎）	九五頁

南枝の花に添へて……………一二二頁（\*以上、ノンブル5）

目次の次の頁にノンブルは無く、中央に五号活字で「装幀 岸田劉生」とのみある。

これより以下は本文で、ノンブルは再び「1」となる。扉頁は四号活字、その他は五号活字の使用が基本である。

目次にはないが、跋文の「南枝の花に添へて」の後に「作品発表年譜」があり、そのノンブルは131〜133、裏白。最後に奥付、その裏の最終頁に『原始と文明の中間に怯える者』（新潮社 大13・1・1）の広告がある。

以上で『詩文集 南枝の花』のおおよそは御理解いただけたであろうから、本稿の課題であるスクラップブックの紹介に戻ることとする。

箱帙があるが、最近のもので、南江二郎とは無関係。表紙と背は紹介済みなので、内容紹介に入ることにしてしよう。スクラップブックにノンブルの類は全く無いので、便宜上、前から順に仮のノンブルを付した。仮のノンブルに続いてへゝ内に南江二郎による注記を記し（注記が無い場合は一字分の空白のみ）、\*以下に適宜、必要な説明を加え、翻字をなした。「／」は改行の代わりに使用している。

0 \*遊び紙一葉

1 「サンデー毎日」夏期特別号に次期文壇を代表する新進作家として掲載せしものゝ \*肖像写真入りの記事「サンデー毎日」小説と講／昭和二年六月十五／南江二郎／本名治郎、京都府、廿六歳早大、文化学院等に学ぶ。「異端者の恋」

- 「南枝の花」外二種の詩集あり◇生命ある人造人間が製造されない以上、詩は科学に圧倒されはしないのだ。<sup>(3)</sup>
- 2 〈都下各新聞消息欄に出しもの〉 \* 「▲南江二郎氏 詩集「南枝の花」を新潮社から出版した今月一杯滞在中」
- 「▲南江二郎氏 新潮社から詩文集「南枝の花」を出版、尚ほ目下上京中、今月一杯滞在中」の二点。
- 3 〈東京朝日新聞に掲載されしもの〉 \* 「新刊出来」の広告。
- 4 〈読売新聞誌上<sup>(1)</sup>に掲載されしもの、昭和二年六月一日ヨリ三日まで〉 〈a〉 \* 井上康文『南枝の花』を読む(上)「の前半。「南江君は歌麿や春信を熱愛してゐると同時にピアズリを愛してゐる」。
- 5 〈b〉 \* 井上康文『南枝の花』を読む(上)」の後半。「とりの子に岸田劉生氏描くところの絵を木版で印刷した高雅な装幀をした本である」。
- 6 〈7〉 〈c〉 〈d〉 \* 井上康文『南枝の花』を読む(中)」。「彼の詩に於いても、詩文に於ても、貴重な言葉が描き出す魔酔境、現実境、幻想境は、彼の洗練された表現の手法によつて実に遺憾なく現はれてゐる」。
- 8 〈e〉 \* 井上康文『南枝の花』を読む(下)」。「最近得た金子光晴君森三千代さん共著の「鱧沈む」と共にこの詩文集を現詩壇の大収穫だと思つてゐる」と結ぶ。
- 9 〈読売新聞六月十日掲載〉 \* ノンブル3とほぼ同内容の「新刊出来」広告。
- 10 〈「サンデー毎日」十月十二日掲載〉 \* 「新刊紹介／『南枝の花』／南江二郎著／南江氏の近作を集めた散文詩集です。『魔鏡堂の喇嘛』『楽死』『能面師清阿弥』『白魚の料理番』『愛経』『雪解』『古式五月人形』『春信幻想詩篇』を収めてゐます。殊に「春信幻想曲」の如きは、あらゆる耽美と、あらゆる淫蕩と、あらゆる汚濁と、尚且つ、あらゆる



る罪悪に対してさへ、ある不思議な美的誘惑を感じる青年期の悩ましい夢想を描写した奇しき詩篇です。装幀は岸田劉生氏。これに野口米次郎の序、外山卯三郎氏の跋を加ふ（定価一円、東京市牛込区矢来町三番地、新潮社発行）。

11 〈大阪毎日新聞社所載〉 \* 「ノンブル3と同内容の「新刊出来」広告。

12 〈詩神七月号〉へ1 \* 福田正夫『南枝の花』の詩的散文」の前半。

13 〈2〉 \* 福田正夫『南枝の花』の詩的散文」の後半。末尾に「六月三日」とある。

14 〈正富汪洋氏評（新進詩人所載）七月号〉 \* 「詩文詩集 南枝の花 南江二郎著」。「新興詩壇の人々が、表面的喧噪的論議に走つたり詩歌と絶縁する日に、この人の存在は、うれしい」。

15 〈河井醉茗氏評（近代風景）七月号〉 \* 冒頭に「性の戯れは性の悩みである。悩みを戯れらしく面白く詩や文章で表はしてあるのが南江君の「南枝の花」だ。門外不出の材料も斯うした新人の手で詩化される時代が来た」とある。

16 〈大阪朝日新聞所載〉 \* 「▲詩文集「南枝の花」（南江二郎著）ピアズレイの繊細巧緻画を散文にあらはしたやうな幻想と情痴の舞踊曲を見るやうな小品と詩と併せて十数篇をあつめてある——東京牛込区矢来町新潮社（二円）」が全文。

17 〈都新聞所載〉 \* 「◇南枝の花（南江二郎著）四年間に亘つて試みた三十余種の散文詩の中から特に自信の深い作品」「春信の浮世絵を通して官能の不思議なものを、きを描いた「春信幻想詩篇」の夢幻的 香と現実的愛欲の悩みを交錯した美しさ、瞑想的な「魔鏡堂の唸」の如きまことに散文詩として代表的作品である、諸篇の形式美、洗練された語句の自由な使駆、著者 技巧は完成の域に達してゐる（牛込区矢来町三新潮社△一円）」。

18～20〈炬火九月号所載〉〈1〉〈2〉〈3〉\*山崎泰雄「南江二郎氏著『南枝の花』」。「最も注目すべきは矢張その表現技法であらう。その語法は実に妖婉として強靱な粘着力を備へて、氏の表現せんとする所を的確に捕捉し得て余す所がない」。

21〈詩歌時報八月号 花岡謙二批評〉\*「詩文集「南枝の花」(南江二郎氏著)。「まこと南枝の花一卷は日本が生んだ最も特異な詩人南江氏を裏附ける最も秀れた詩集である静かな蠱惑、古雅なる映像に接するが如く湖水の底の青い水影に身を濡らしてゐるやうな気がする。斯くまで日本語が持つ不思議にも妙なる色合の韻律を表現し得る詩人は未だ生れてゐないと言つても過言ではない」。

22〈詩洋九月号所載〉\*前田鉄之助「詩書大観 詩文集「南枝の花」——南江二郎著」。「南江君のエロチシズムの完成された美の集積である」。

23〈東京朝日新聞所載〉\*「新刊名著推奨」「松本丞治／新自由主義(上田禎次郎著)」「堀口大学／南枝の花(南江二郎著)」 大変に面白いと思つて読みました。近年やうやく自分の詩界がはつきりと見えて来たらしい、著者の姿がやうやく私にはつきりと見えて来たやうな気がうれしうございました。近頃私をよるこばせた詩集の一つです」。

24〈掌〉十月号所載 室木豊春\*「新著紹介／詩文集 南枝の花 南江二郎氏著」。「著者の詩境は、かの江戸図絵を想はしむる如き憂鬱なる浪漫的情緒的想華の閃めきと、かの青空に翳す碧色瑠璃環にも比すべき清艶さと、彩華灼爛たる官能美の交錯にある」。

25〈詩歌時報十一月 清水暉吉〉\*○『南枝の花』。「やや病的な神経のひらめき、そこには変態的な色と光と

がはつきりしてゐる。そして南江君が日頃愛してやまない画家ピアズレーの線と匂ひが浮いてゐる。

26 〈新生所載 高木斐嶷雄氏〉 \* 「新刊詩書紹介／詩文集 南枝の花（南江二郎著）」。「岸田劉生氏装幀、野口米次郎

氏の序文、をもつて始まつた美しい詩文集だ」「近頃異色の好著である」。

27 〈十二月各雑誌〉〈地上楽園・正富汪洋〉 〈民謡詩人・中西悟堂〉 〈詩神・井上康文〉 \* 「昭和二年詩歌壇、詩人、」。

正富汪洋は「忘れられない詩集だつた」、中西悟堂は「重要な収穫だつた」、井上康文は「表現に於いてラフな詩が多い現詩壇にとつて見るべきものであると思ふ」と述べる。

28 29 〈新潮〉「文章倶楽部」一八、九両月に表紙裏其他に掲載 \* 実際に貼付されているのは「新潮」第二十四年第八号、昭和二年八月号に掲載された広告。

30 34 \* 外山卯三郎「現代新詩人評論 その一 南江二郎の人と芸術——「南枝の花」を中心として——」。南江

二郎による注記は無いが、雑誌「地上楽園」第二卷第十二号、昭和二年十二月号（通卷十九号）に掲載されたもの。

「一、京都府亀岡の印象」に「京都亀岡に生育した詩人南江二郎には伝統の血潮があつたと共に一つの優れた慈母がある」、「二、人としての孤独性」に「真の孤独に生きる時、そこには無限の世界が開かれ、又法悦の媚葉がある。此処に彼の芸術の契機モメンツがあると共に、又奥深い未来ツクシがある」、「三、人としての南江二郎」に「豊かな家庭に育ちながら、此の生得的な神経質が常に彼に精進を呼び起させたものである。而して又此の要素が再び今後の彼の人とその芸術クレストに強く強く現れて来るだらう」、「四、「南枝の花」を中心とする彼の芸術」に「南江二郎には生得的にペダントイクな性質がある。こゝに彼の歩みの新鮮があると共に、彼の作品に一種の香味を加へるものである。此れは彼

38

\*有島生馬からの書簡、便箋四枚。「南江二郎様／思ひがけない御無沙汰をしてゐるために、その上の御無沙汰



の長所であり、又同時に短所でもある」、「五、南江二郎の詩的技巧」に「文字通りに優れた技巧を有してゐる。それは時として悪戯にまで見ることがある。然し此の技巧が彼を優れた作家に精進せしめる契機であると共に、作品に古典的な薫香を与へるものである」とある。

35  
36 \*白紙

37〈萩原朔太郎氏より〉\*葉書。宛名面の上部は糊付けされていて（他の書簡や葉書も同様）、判読しがたいところがあるが、六月三十日午前八―十時の消印。「京都府亀岡町河原町／南江二郎様／大森、萩原朔太郎」。「最初の散文詩「魔鏡堂の喇嘛」は、内容、形式共に面白く、珍しいものに思ひました。芸術的香気も高く佳いものだと思ひます。この詩集を日夏耿之介、芥川龍之介二氏に贈つてごらんなさい」。

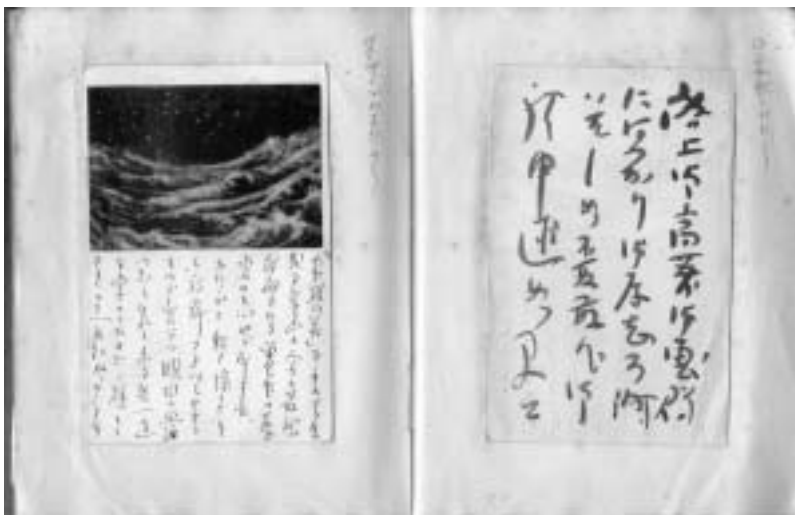
- をよぎなくさせられる次第です、この心理は君にも分つて頂けるでせうか、それにしても少し極端過ぎるので何とも申訳の言葉はありません／君が高雅なる著南枝の花を持つて御来訪下されたのは私が山陽山陰の旅中にあつた頃のことと思ひます」が冒頭。中程に「私に対するデヴィーションは唯だ勿体ないと思はれる許りです 敢て当りませんけれども御厚意を改めて御礼申し上げます／鎌倉時代の御回想は同じ思で読みました」とあり、「大変におくれた礼状ですが何卒お許し下さい而して益々君の筆硯の健かなるを祈ります／八月一日 姥谷にて 有島生馬」と結ぶ。
- 39 \* 有島生馬からの封筒。消印は「鎌倉」以外は判読不能。「京都府下亀岡町／南江二郎様／鎌倉姥谷／有島生馬」。
- 40 \* 河井醉茗からの封筒。「神奈川平塚／2／6・3／前3―6」の消印。表に「京都府亀岡町／南江二郎様／東海道平塚 河井醉茗」、裏に「昭和二年六月三日」。
- 41 \* 「六月三日」付の河井醉茗からの書簡、便箋三枚。「御詩集南枝の花忝なく存じます／近頃珍しく東方文化の美しく咲き誇つたやうな詩集だと感じました／材料の珍奇な点はたゞ／驚異です小生の忌憚のない批判を短く述べたいと思ひます、大■近代風景でも一寸書いて置きませう、詳しく批判する方は他におありでせう」。
- 42〜43 \* 「七月廿四日」付の土田杏村からの書簡、便箋二枚。封筒は欠。「静かな夜にゆつくりと拝読いたしました。益々澄んで行かれるデリケートな線を嬉しく拝見いたしました。／どれもこれも三唱すべき作品だと思ひました。装幀の美しいことも悦びの一つです。／御承知かとも思ひますが、春以来アルスの児童文庫のために、忙しい戦ひをつゞけて来ました。昼の間はそのためにペンをはずす間がありませんでした。そのいそがしい気分では感想を申し述べる気分にもなりませんでした。夜だけが私の世界で、しづかに御著を拝見した次第です」。

芥川龍之介氏に贈ってごらんさい



- 44 \* 三木操（三木露風）からの封筒。消印は三日のみ判読可能。表に「京都府亀岡町字河原／南江二郎様／御被、裏に「緘」「東京市外戸塚町上戸塚三七五 三木操／昭和二年六月三日」。
- 45 \* 三木露風からの書簡、巻紙一枚。「啓／御新著詩集「南枝の花」御寄贈被下御受け致候／詩集の題甚だ情趣有之内容奇に富み装幀扉絵佳に候 近頃珍らしき新著と存候／右御礼迄 勿々／昭和二年六月三日／三木露風／南江二郎様」。
- 46、47 \* 白紙
- 48 〈日夏耿之介氏より〉\* 葉書。「2／5・30／后0―2」の消印。「京都三条通寺町東入／大学堂書店気付／南江二郎様／東都／二十九日 日夏耿之介「啓上御高著御惠贈にあつかり御厚志万謝いたし候」。
- 49 〈理学博士西村真琴氏より〉\* 絵葉書。「札幌／2／6. 10／前10―12」の消印。「東京市外下落合一九三二／南江二郎様／札幌南三西一三／西村真琴」。「彼の情熱は静に燃えて正直に光りを放つ……／ヨネ野口の序文の中に〇〇点を附して妻に読んで貰ふことにしました。」。
- 50 〈島崎藤村氏より〉\* 葉書。「四谷／2／6. 5／后2―3」の消印。「京都府亀岡町字河原町／南江二郎様」「御著「南枝の花」拝受しました、ゆつくり拝見してからと存じますがとりあへず御返事まで、六月五日、／東京麻生区飯倉片町三十三、 島崎」。
- 51 〈坪内逍遙氏より〉\* 「第七回帝国美術院展覧会出品 (お夏) 勝田哲氏筆」の絵葉書。消印は判読不能。「京都市亀岡町／南江二郎様」。「御著ありがたう／御返礼のしるしまでに近訳一部さしだしました御入手下さい 草々

芥川龍之介氏に贈ってごらんさい





／東京牛込余丁町／坪内逍遙<sup>①</sup>。

52 〈百田宗治氏より〉＊葉書。「麹町／2／5. 29／前11－12」の消印。「京都府亀岡／南江二郎様」。「南枝の花／拝領、いづれ御礼状さし上げます。／百田宗治」。

53 〈高村光太郎氏より〉＊「国華創刊二十五年記念」「国華社印行」「神象図 本派本願寺蔵」の絵葉書。「駒込／2／5. 29／前11－12」の消印。「京都府亀岡町／南江二郎様」。「詩文集 南枝の花一卷 忝く頂戴、感謝いたします、しつかによみたいと思つてゐます、／高村光太郎／五月廿九日」。

54 55 〈佐藤惣之助氏より〉〈生薑の工芸／美術紙の由／御笑覧〉＊封筒欠。「詩文集 南枝の花御恵贈深謝します／濁流にまみるゝことなく独自の君自身の芸術をはつきりと築かれてゆくのをうれしく拝見致しました。／卯の花の／月となりけり／けふの雨／御挨拶まで／惣／二郎さま」。

56 ＊室生犀星からの書簡、「松屋製」の原稿用紙二枚。「拝啓／此間「南枝の花」を貰ひ旅行準備で失敬しました。あゝいふ形で書物をお出しになるのも大変かと思ひます。併し時はいつかは成就の冠を君にかぶせることと思ひます。僕もどうやらそれにあやかつた訳ですから。／その後ずっと当地に居ります。十六日ころ帰京します。京都へ行かれるやうになればいいと思ひます。併しまだ分らないのです。／僕の初集の評は少々僕には恐縮です。／処がきがないので気附で出します。近作一つ叱正下さい。(二ついづれも迷へり)／きりぎりすゆざまし冷えて 枕もと／夏ゆくや ゆざまし冷えて 枕元／犀／南江二郎様」

57 ＊室生犀星からの封筒。「軽井沢／2. 9. 6／前9－12」の消印。「東京市外駒沢町上馬一九五門脇様方／南江

芥川龍之介氏に贈ってごらんさい



二郎様。「九月六日／信州軽井沢六五八／室生犀屋」。

58 〈高須芳次郎氏より〉 \*葉書。「牛込／2／6 15／后0-1」の消印。「京都府下／亀岡町河原／南江二郎様」。

「東京市牛込区南横町五七／東方文学社／電話牛込四参〇九番」の印を押して「高須芳次郎」と署名。「肅啓／御壯康を賀しあげます 扨御高著御惠贈に預り感謝仕ります 拝読の上何れ所感申述度先は右御礼まで匆々」。

59 〈正富汪洋氏より〉 \*絵葉書。消印なし。「京都府／亀岡町河原／南江二郎様」。「芸術の香気高い御作集をみるは少からぬ喜びでございます」。絵葉書の面には「ゆる／＼ 拝見したくおもつてゐます／六月四日／正富汪洋」とのみある。

60 61 \* 山内義雄からの書簡、便箋二枚。封筒なし。「「南枝の花」御惠贈にあづかり難有御礼申上げます／旅行中だったのでその留守中に頂戴 御挨拶がおくれました／巻頭「魔鏡堂の喇嘛」の佳什あり、「文人」誌上ではじめて拝見したときの思ひ出をたぐつて「地肅の夜は霰声で満ちてゐた」の結句まで息をもつかずよみおりましたとありあへず御礼申上げます／六月二十六日 山内義雄／南江詞兄／侍曹」。

62 〈萩原恭次郎氏より〉 \*葉書。「世田谷／2／6. 19／后0-3」の消印。「京都市亀岡町／南江二郎様／市外世田谷若林六一〇／萩原恭次郎」。「南江兄 先日は詩集ありがたう。／いつものやうな僕の家庭的貧困の上に、引き越しさはぎで、お礼がをくれました。然し本はみな拝見しました。家も漸くうつれました。来月初に、三科と一緒に京都にゆくかも知れません。ルンツの芝居をやるのです。「雪解」が一番僕は兄らしい詩ぢやないかと思ひました。好きです。くはしくは別に——」。

芥川龍之介氏に贈ってごらんない



63

\*岡本潤からの書簡、「東京・本郷・南天堂書房版」の原稿用紙二枚。封筒なし。「南枝の花」ありがたく拝受致しました、／批評めいたことは僕には言へません、「春信幻想詩篇」を特に興深く拝読しました、あの詩を読むとまた京都が思ひ出されます、僕のやうな性格の男は京都に住んでるとアクビばかりしてゐますが、一旦京都を離れると、またひどく恋しくなります、／四条河原の涼み季節が近づいて来ますね、僕が京都の美しい思ひ出に耽らずにはゐられないやうな、美しい詩をこれからたくさん見せていたゞきたいと思ひます、僕がこんなことを言う、お世辞のやうに聞えるかも知れませんが、これは本音です、僕は、決してメチャな猿武者ではないつもりです、僕の弱気が表面の僕を猿のやうにフン飾してゐるのです、／なんだかへんな手紙になりました、／乱筆で甚だ失礼ですが、お礼の言葉に加へます、／六月六日 岡本潤／南江二郎様」。

64

\*相川俊孝からの書簡、「文芸研究会原稿用紙」二枚。封筒なし。「六月十七日／東京府下滝ノ川町字十里四

六四／相川俊孝／南江二郎雅兄」。「謹啓／貴著、詩文集「南枝の花」御恵与被成下誠に有難奉感謝候 熟々拝読致

候処、兼而「文人」誌上に於て拝見致候「魔鏡堂の喇嘛」特に光輝高きものを感じられ候、其他、種々と「散文詩」

に就いて学ぶところ多きを貴兄に深く謝し申候、小生、漸く放浪の旅より帰宅致し忽々拝見致候まゝ其の意を尽さざるもの多々可有之とは存候へ共不取敢御挨拶まで如斯に御座候／敬具」

66

\*白紙

67 以上の外、詩集寄贈の礼状、喜びの言葉等を贈られし氏名左の如し／○中勘助 ○渡辺均 ○飛田角一郎 ○竹

内勝太郎 ○西川勉 ○宮木喜久雄 ○春山行夫 ○長沼重隆 ○長谷川己之吉 ○前田鉄之助 ○向井史郎

○中西悟堂 ○高木斐嵯雄 等の諸氏にして／外に余が同人の一員なりし「詩学」同人／○外山卯三郎 ○土岐仲男 ○錦光山雄三 ○辻村もと子 ○北岡実 ○岡橋祐 諸君の懇切なる喜びの言葉、批評等を受く、

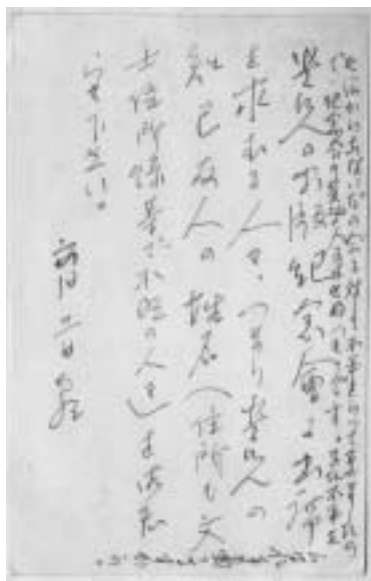
68 \*阿部四郎からの葉書。「渋谷／＼／2／6. 2／后6-8」

の消印。「京都市外亀岡町／南江二郎様／東京代々木／阿部四郎」。「貴兄の出版記念会に出席を求むる人々、つまり貴兄の知己友人の姓名(住所も文士住所録等で不明の人々)を御知らせ下さい。／六月二日朝／長沼からこないだの会に対して不平を云つて来ましたので、記念会の発起人にはせぬつもりです。また不平を云はれると困りますから。」。

69 〈左の如く六月一日余も同人の一人たりし「主観」の同人

なる阿部四郎氏より「主観」同人白鳥省吾、福田正夫諸氏発起人となりて、「南枝の花」出版記念会を開催したき旨の通知あり、されど余は近時、文壇に行はるるが如き売名的なお祭り騒ぎ的出版記念会なるものを好まず／故にその厚情はうけたるも出版記念会開催の事は之れを辞退せり、\*「白鳥省吾、福田正夫諸氏発起人となりて」についての部分については、別の連絡があったのかもしれないが、68の阿部四郎からの葉書による申し入れを受けてのものである。左半分が欠けている。何かが書かれていた形跡があり、破棄するために、ちぎったのであろう。

70 \*白紙。69の裏面なので、当然のことながら、右半分が欠けている。



71 〔昭和二年度「信天翁」所載 安藤真澄君の評〕\*タイトル無し。「そのなかで特に南江君の詩篇はその芸術上の価値を云々するよりも、いつも行きつまることを恐れて絶へず活動し、進展し、何ものかに転換しやうと努力する、其の稀に見る芸術家的精進の心、換言すれば芸術上の覇気、芸術上の向上心とも言ふべきものゝ現れとして興味深く読むことが出来た。一つの処にいつも停滞して動かない芸術家の創作は死骸も同様だ。絶へず活動し反省し、苦悶し、模索し、未知の扉を開拓して行く処に芸術家の面目があり、生甲斐があるではないかと思ふ。この点で南江君ほど真剣に自己の芸術に精進して居る作家もそう多くはないと思ふ。」がほぼ全文。

72 73 〔「信天翁」四月号所載〕\*安藤真澄「南枝の花の主人」。全三章。「一」に「経机のやうな古めかしい机によりかゝり、昨夜、下痢したと云ふ、げつそり瘦せたこの家の主人は、その蒼ざめた細い手に室生犀星の故郷図絵集を持つてゐた」「僕の兄は南画を描いてゐたのだが早く死んで了つた」、「二」に「健康にならなくては駄目だ。スパルタ式体操、菜食主義」「友情と云ふものは得難いものだよ。いつか詩話会の会合の時だったが、萩原氏が誰れかに殴られかゝつた時、室生氏が直ぐ飛んで行つて、その相手を殴りに行つたことがあつたが僕はそれを見て何だか真の友情と云つたものに泣かされたよ」、「三」に「書齋の中央には彼が好んで求めたいと云ふ木谷女史の描いた妖艶な年増女の人形遣ひの額が掲げてある。それが妙にこの洋室とかけはなれたエキゾチックな色彩を投げかけてゐる。その下の洋書のぎつしり押し詰まつた書棚の上には、野口米次郎、佐藤春夫、芥川龍之介などの書が載せてある。南枝の花の主人はこの絵を背にして、傀儡図解を書き、アルチュール。ラムボオの放浪を思ひ、ピアズリを書き、ロツプスの秘戯画を発見して秘かに楽しんでゐたのかも知れない」とある。

74 ↓ \*以下、全くの白紙。識語等、何も無い。

以上で、『詩文集 南枝の花』のスクラップブックに関するおおよその紹介は終わったことになる。もとより筆者の主観的関心による抜粋で、不十分な点多々あるであろうが、大正末から昭和初めにかけての詩壇の一端が判明する資料であることは認めていただけるのではないかと思う。また、詩に関心のない人にとっても、筆跡のサンプル集としての意味は持つであろう。諸賢の大いなる活用をお願いして本稿を終わることにする。

(1) 『文芸科外読本』（立命館出版部 昭9・5・5）の「跋文に代へて」に所収されている『「南江」の呼称』（末尾に「一九二八年十一月『民謡詩人』所載」）に「本名は南江治郎だ。私はこの「南江」に続く「治」の字格を形の上から好まない。で、南江二郎と改めた」とある。

(2) 読売新聞大正十四年十二月二十日四面の「よみうり抄」に「▲南江二郎氏 新詩潮社と共に市外上落合五六八へ転居」、「日本詩人」六卷二号（大15・2・1）の「詩壇往来」に「南江二郎氏の前号移転消息は間違ひで、下落合一九二三から、上落合五六八へ移転されたのである」とある。

(3) 「小説と講」「六月十五」はママ。『南枝の花』の本文72頁に「生命ある人造人間が製造されない以上／詩は科学に圧倒されない／ゲラ刷を見ながら余白にー」とある。

(4) 「紙上」ではなく「誌上」となっているのは原文のママ。

(5) 一字空白の部分があるが、原文のママ。



(6) 「南枝の花に添へて」に「この詩文集を謹んで有島生馬氏に献じたのは、西暦一九二三年の晩春から初夏にかけて、鎌倉で有島さんからうけた数々の御厚情を永久に記念したい為である」「あの玲瓏として優雅な伊太利語の音色からうけた影響は、氏の人格からうけた薫陶と共に、私にとつて決して無益なものでなかつた」とある。南江二郎は有島生馬からイタリヤ語を習っていたのであり、南江治郎『名家賀状百選』(グラフィック社 昭45・11・1)には「恩師、有島生馬先生が、題簽と扉をお与え下さった」。

(7) 坪内逍遙の南江二郎宛書簡は他に多数残されている。拙稿「坪内逍遙と南江二郎」(「文林」30 1996・3・20) 参看。